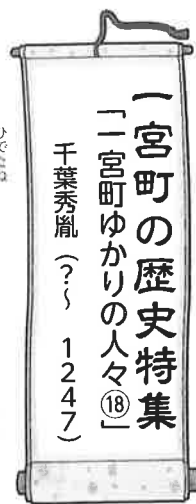


令和2年2月号



千葉秀胤(ひでたね)は上総千葉氏の千葉常秀の子で、鎌倉時代に御家人として活躍した人物です。

上総千葉氏は寿永2年(1184)に源頼朝によって粛清された上総広常(ひろつね)の地盤(上総国玉崎荘ほか)を継承した一族で、千葉氏宗家である下総千葉氏の系譜を引いています。

秀胤は寛元2年(1244)には幕府の評定衆(幕府の最高政務機関)に加えられます。これは千葉氏では唯一であり、当時の秀胤は千葉氏宗家をしのぐ力を有していたことが分かります。

そのため一族の代表として活動し、三浦氏らとともに前將軍・藤原頼経(1218〜56)を押し立てて、執権・北条氏と対立しました。寛元4年(1246)の宮騷動(名越光時の反乱未遂、藤原頼経が鎌倉から追放された事件)により反北条氏勢力が失脚すると秀胤も評定衆を更迭され、所領を一部没収されます。宝治元年(1247)6月、宝治合戦で執権北条氏により三浦泰村・光村が滅ぼされると、三浦氏と姻戚関係にあった秀胤も追討の対象となります。同年6月7日、くしくも千

葉一族の大須賀氏、東氏らが秀胤の本拠地である上総国玉崎荘大柳館(睦沢町)を攻撃、秀胤は館に火を放ち息子ら一族郎党163名とともに自害しました。これにより上総千葉氏は滅亡します。

一宮町において、上総千葉氏の痕跡は残念ながら確認できていません。しかしながら、上総氏の地盤を引き継いでいる点、本拠地が大柳館であった点を考えると、上総国一之宮である玉前神社の所在する地域は、上総千葉氏にとって重要な場所であったといえます。



▲大柳館跡の標柱 (睦沢町北山田 235 付近)

(教育委員会 江澤一樹)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

令和2年3月号



軍荼利山植物群落

軍荼利山は九十九里平野に面した標高約75mの丘陵で、気候は温暖で降水量も多く、スタジイを主体とした常緑広葉樹林におおわれています。

長年信仰の対象として保護され、現在も約4ヘクタールの山林の大部分が自然の景観をとどめています。特に山頂部のスタジイ林は、直径1メートル近いものも見られ、自然林の様相を呈しています。

この山は昔、漁師たちが海の位置を知る目印としても使われました。植生はスタジイを中心として、アカガシ、アラガシ、タブノキ、シロダモ、ヤブニツケイなどからなり、森林内の地面にもコバノカナワラビ、イブセンリヨウなどの常緑性の草本や低木が繁ります。カゴノキやリンボク、キジヨラン、サカキカズラ、ハナミヨウガなどのほか、タブノキ等に寄生するオオバヤドリギなど暖地性の植物が随所に生息しています。

また、この山の北西側は中腹から地下水がたたたり落ちており、周囲は湿った環境となっているため、暖地性のシダ類の宝庫となっています。

す。カツモウイノデ、クリハラン、ハチジョウウカグマ、ノコギリシダ、マツザカシダなどの貴重なシダ類も生息しています。さらに境内にはレッドリストの保護生物・ハイハマボスも生息しています。県内で間近に見られる数少ない生息地となっています。これらの植物は「軍荼利山植物群落」として、昭和32年(1957)1月17日に県の指定天然記念物に指定されています。



▲軍荼利山 (南東より)



▲東浪見寺へ続く参道

【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (教育委員会 江澤一樹)